

「伸びしろ」がまだ感じられる中国 —なぜかゴミ捨て場となっていた日本軍司令部跡—

ジャーナリスト 松尾文夫



中国は二〇五〇年までに「社会主義現代化強国」を築き上げる。中華民族は「はつらつとして世界の諸民族の中にそびえ立っているであろう。」—二〇一七年一月一八日から北京で開かれた第一九回中国共産党大会で、国家主席に再任され、毛沢東以来といわれる強力な党内指導権を手にした習近平主席は、こう高らかに宣言した。

その直前の中国を、私は四年ぶりに訪れていた。昨春、私が一四年間にわたる米中双方でのリサーチをもとにまとめた『アメリカと中国』が岩波書店から刊行されたのを機会に、リサーチで世話になった北京大学と清華大学の先生たちから、拙著について報告してほしいと招かれたからである。しかも、講演の合間を縫って、一九三五年から約二年間、日本軍守備隊の将校であった父親と共に過ごし、私の人生の記憶の始まる要衝の地、山海関にも連れていってもらった。
・マンハッタン計画中国版

この中国旅行で私が強く感じたのは、二つのことであった。

一つは、習主席の「そびえ立つ中国」を今世紀半ばまでに実現するという「大見得」が、必ずしも空虚なうたい文句とは思えなかったことである。

もちろん貧富の差の拡大、都市と農村との不均衡、ジョージ・オーウェルの『1984年』を彷彿させるコンピュータ社会の矛盾、一向に減らない交通渋滞と大気汚染—といったネガティブな様相には事欠かない。

しかし、四年前に比べて目に見えてわかる生活水準の向上の中で、「明日の技術」が一般社会に定着しているのが目についた。例えば現金を使わない「微信支付」(いわゆる電子マネーでの支払い)の徹底した普及である。私が滞在した、北京大学の研究者用宿舎のロビーで、一本三三元の水のボトルを一〇元札で購入したところ、七元のおつりが出てくるまで大騒ぎとなった。

電気モーターの実用化にも驚いた。学生が乗るスクーターのほとんどが電気エンジンで、つまり音がしない。ふと気が付くと後ろにバイクが、こちらが歩くのを待っているようについていて。おかげでバイクの交通事故が増えているという。教授の一人によると、こうした「明日の技術」の延長で、「メイド・イン・チャイナ2025」と名付けられていた高性能の新半導体、AI(人工頭脳)、産業用ロボット、電気自動車など新しいエネルギー車、新医療設備、そして宇宙の「征服」といったあらゆる種類の技術革新に挑戦する大戦略が進行中だという。しかも世界各国の先行巨大企業との提携、合併など、積極的な国際協調も否定していないのが特色という。

「一帯一路」政策の陰に隠れているものの、四兆ドルという貿易黒字を背景に、かつてのアメリカが第二次大戦末期から大金をつぎ込んで、ついに核エネルギーを手にしたマンハッタン・プロジェクトのような野心的な戦略だともいわれる。

一三億の人口の欲望に火をつけた改革・開放路線が、共産党独裁のもとで行われている基本的な矛盾を抱えながらも、この中国の超大国化は進む。まだまだその「伸びしろ」はあると感じた。しかも、トランプ大統領の元でのアメリカが「アメリカ第一主義」に立てこもるなか、この中国の独特な「国際主義」との間に奇妙な新しい米中間の「友好関係」が生まれようとしていることに注目すべきだろう。

・山海関で東アジアとの和解を想う

もう一つは、山海関訪問で経験した、日本が中国に与えた不幸な過去を中国人はまだまだ忘れてはいないとの痛烈な経

験であった。

北京から南東に約三〇〇キロ、旧満州と華北を渤海湾から始まる万里の長城が隔て、中国の歴史で数々のドラマを生んだ山海関の街はきれいな公園となって整備され、「天下第一の関」という大きな額がかかっている。

なんと北京大学の友人たちは、日本軍の司令部だったという建物の残骸を見つけて出してくれた。近くにあったはずの私の自宅こそ残っていないものの、そこには「山海関八国聯軍軍営遺址」の石碑が立ち、あとは一部には汚物がまかれた荒涼としたゴミ捨て場の風景が広がっていた。新幹線の駅とも近く、近代的なアパートや建物が並ぶ一角にわざと放置されているような風景に、私は中国人の心に残っている、日本の侵略に対する深い怨念を見たような気持ちになった。

山海関からの帰り、同じ渤海湾に面した瀟灑な保養地、北戴河でランチを取った。習近平主席をはじめ、政府首脳が毎年夏には、党などの最高人事を密談する場所として知られている。首脳たちが来るときには一般人の立ち入りは禁止されるといふ海岸では、一〇組以上の新婚夫婦がそれぞれに渤海湾を背景にポーズしていた。

この海の東南五〇〇キロには、今北朝鮮危機の主役として世界の目をくぎ付けにしている平壤がある。この平和な風景を見ながら、まだ日本が戦後七二年経っても成し遂げていない、東アジアとの歴史和解を急がねばと改めて思った。

(二〇一七年二月一日記)